ASAKOIHITO REPORT 2017

Since 2014

TSUYOSHI YOSHIHARA
SHOHEI MATSUKI
TAKAYUKI KATO
MIKI IMAMURA
RYOTA SHINOHARA
NAOKO KATO

Since 2015

AKIRA SATAKE
HIDEKI NAKASHIMA
DAISUKE NISHIMURA
NAOKI TAKADA

朝来市地域おこし協力隊「あさこいひと」
レポート 2017

「あさこいひと」の
これまで
これから

2014年4月1日に結成された、
兵庫県朝来市地域おこし協力隊「あさこいひと」。
総勢10名に増え、それぞれが所属する地域において、
さまざまな活動を展開しています。
その流れの中で、3年の任期を終える隊員と現役の隊員がチームとなり、
スタートした新しい取り組みも。
隊員同士の対談・インタビューを通じて、
これまでの活動と今後のビジョンをレポートします。

2017年3月

目次

P3 SESSION 1
朝来まちづくり機構
佐竹鑑／中島英樹／西村大輔／篠原諒太

P6 SESSION 2
鹿工房ロス・カサドーレス
吉原剛史／髙田尚希

P8 SESSION 3
トリノスバコ
加藤貴之／加藤菜穂子

P10 INTERVIEW 1
松木祥平

P11 INTERVIEW 2
今村未希

あさこいひと宣言

いま朝来市で暮らす人が　よりこのまちを愛せるように
このまちに遊びに来るひとが　また来たいと思えるように
そして　次の朝日が昇るとき　笑顔で一日が迎えられるように
「あさこいひと」はだれよりも強く朝来に恋をして
みんなと話し合い　協力し合い　時には自らが太陽となり
朝が来るのが楽しみなまちとなるように
朝来の新しい朝を照らします

ASAKOIHITO REPORT 2017

Publisher：朝来市市長公室総合政策課　Art Direction／Photograph／Design：木村 淳

SESSION 1
朝来まちづくり機構

隊員によって結成された朝来まちづくり機構。
メンバーが語る、
朝来市の空き家問題から
移住定住促進に向けたビジョン。

朝来まちづくり機構（以下、機構）について、そもそもの立ち上げのきっかけは？

佐竹　2015年の秋頃かな？全国的に増えている空き家について朝来市ではどうなっているのか、隊員それぞれが担当するエリアの空き家状況を探ってみようということで最初にやり始めたかな。協力隊の任期終了後の仕事を創出するという意味でも、空き家の管理がビジネスになるんじゃないかというところからスタートだったんです。空き家は放置しておくとどんどん傷んでいきます。それを管理するビジネスの可能性があるかを探っていこうということで、協力隊で何度か勉強会もしました。

中島　勉強会では組織化や法人化を今後どうするかといった話もしましたね。機構は現在のところ任意団体ですし。

佐竹　1人1人でやるよりは、それぞれが持ってる強みや地域の特性を生かして、じゃあグループでやったら、となって。お互いにフォローできるというメリットも大きいですし。

西村　僕は協力隊員として入った朝来市あさご暮らし応援課の一員として、「空き家バンク」など、業務で携わっています。市役所も移住定住支援や空き家対策を行う民間組織の立ち上げを望んでいたので、僕たち協力隊がその活動を担う組織を立ち上げることで、行政と連携してサポートできる体制づくりが出来つつあり、当初望んでいた形ができつつあるのかなと。今では、市職員としての業務と機構の業務を一緒のものとして行っている感じですね。

篠原　僕はカメラマンなど広報面でサポートさせていただいています。もともと僕は朝来市観光交流課の所属で空き家には直接関係がないところにいます。でも今取り組んでいる市内の高校生の課外活動プロジェクト「あさご高校社会活動部」の活動の中で、空き家を活用した「教育民泊」みたいな展開ができないかなと考えて参加しました。

中島　協力隊メンバーの得意分野や持ってる情報、活動エリアもそれぞれやっぱり違う。お互い持ってる情報であったりとか能力、経験を出し合っていく中で、色々な事業に展開してやっていこうかという感じです。

佐竹さんは与布土自治協、中島さんは梁瀬自治協に所属ですが、朝来市山東町が活動の拠点になっているのでしょうか？

中島　「空き家の片付け」の業務では朝来市生野町の方面へ伺ったり、定期的に行っている「空き家管理」では、旧朝来町へ伺ったり。そもそも各隊員の活動エリアはあるんですが、空き家自体は朝来市山東町だけに限られた話ではないので。機構としては、空き家対策よりももっと上位のミッションがあり、朝来市への移住定住を促進していきたいんです。それを行うためには、やっぱり移住者の住居としての空き家をどうこちらで利活用していくかということがあるんです。そこはエリアにこだわらず、市内全域で取り組んでいます。

移住定住を促進させるにあたり、移住希望者の仕事の創出という部分がどの自治体もネックになっていると思います。そのあたりについてはいかがですか？

西村　機構では「大人のインターンシップ」という取り組みを始めました。移住希望者の方に実際に市内で農業体験などを行ってもらうことができます。

佐竹　仕事と住む場所って両方とも確保するのって結構ハードルが高いんです。なので、仕事は機構側で探して、住まいとパッケージにして体験しませんかという取り組みを始めました。僕らみたいに起業や冒険心を持ちながら地方に来て何かやろうかという人も、だいぶ移住し終わった。これからはもう少し手堅く移り住みたいていう人が増えるだろうと僕は思っています。そういう人の希望に合わせながら、住むところと働き口をセットで提案し、気軽に朝来での生活を体験してもらえる取り組みがこれからいるんじゃないかなと思って。地方にも仕事はあることはあるんです。でも都市部の人に地方に仕事があることを知ってもらう機会が少ないんです。

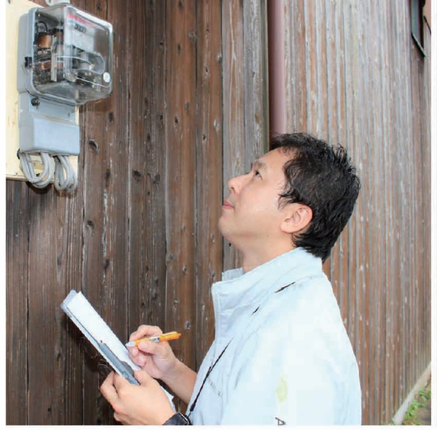
中島　商工会の人とたまに飲んだりすることがあるんですけど、そういった人達と話してても「仕事はあるんやけどな〜、求人出しても来てくれへんのや〜」みたいな話を結構される。仕事もまぁまぁあるし、ただやっぱり来てくれない。それが知られていないっていうのが一番ネックなのかなと。

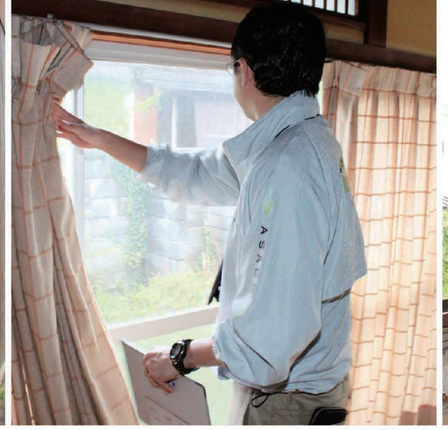
篠原　以前、市内の経営者の方にお話を伺いました。その方は市内事業者に、求める人材についてアンケートを取ったらしいのですが、「即戦力が欲しい」という思いも正直あるかもしれませんが、重要視するところが例えば「挨拶が元気にできる人とかそれくらいの回答だったらしく、専門的な技能はそこまで求められていないという結果だったそうです。

中島　移住希望者に「移住したい！」って熱があっても、「仕事はあるのか」、「住むところはどうしよう」と考える間に熱がどんどん冷めちゃうんですよ。なので「大人のインターンシップ」のという就農モニターで朝来市のこと、仕事のことを体験してもらう。それで気に入ってもらえれば、住居と仕事は体験してもらった土地でお世話できますよっという流れにできれば、移住に対する敷居がすごく下がります。移住への熱が高まっているうちに、それができれば、移住促進に繋がるかなと。その役割を僕たち機構が今後担っていければと思っています。

協力隊員として、佐竹さんと中島さんは「地域自治協議会（以下、自治協）」に、西村さんと篠原さんは「朝来市役所」の一員として活動されています。それぞれ組織に所属していることのメリットはありますか？

中島　朝来市全域だったら人口は約3万1千人…梁瀬地域だったら3000人ちょい。だいたい全体で言ったら約10分の1、面積の比率は約3.5%。それだけ限定されたエリアで動きたいように動くので、やっぱり人との繋がりは作りやすいし、顔も覚えてもらいやすいし。というところでそれはメリットなのかなという気はしますね。





市内の空き家調査、簡易清掃といった空き家管理サービスなどを定期的に行っている。

佐竹　自治協の中で、自分の仕事ぶりを認めてもらえれば、ある程度の裁量と決定権を持って企画やプロジェクトを動かせるしね。

西村　僕は朝来市職員と言う立場で、業務の1つとして空き家バンクの運営・管理業務を行っています。そういう意味では機構での動きと連携できる部分もあり、任期終了後も市役所との連携や相互サポートが行えるのは大きいですね。僕の場合は養蜂業や狩猟といった別分野の事も今後の生業としてやろうとしているので、農林振興課などの違う課の方からのサポートもしていただいています。

篠原　いまは変わりましたが、当初は朝来市職員のルールの中で以前に仕事にしていたデザイン業務は、副業として難しいなど制約となることもありました。ただ、良い面も多くありました。まちの中心とも言える市役所には情報や仕事が集まります。就任1年目が竹田城跡ブームのピークで、この好機を活かすために、職員の方や地域の方と一緒になり、色々なチャレンジをさせていただきました。朝来市ポータルサイト「あさぶら」や、デザインの仕事は市役所の内部にいたからこそ形を広げることができたのかなと思います。

ちなみにこの中では篠原さんが唯一の第1次隊員です。3年間を振り返ってみて、朝来市の協力隊の特色ってどんなものでしょうか？

みんな良くも悪くも隊員全員がばらばらという点でしょうか。所属先や担当エリア、職歴、そして性格も。自治協所属の隊員からには、観光交流課では手に入らない地域の情報を教えてもらったり、人と繋いでもらったりしました。一次の隊員は勢いもあり、PR力の高い個性の強い隊員が多かった。そして二次隊員の方が入ってきて、社会人経験も豊富で物事の進め方を知っている方々が加わり、本当に色々なことを学ばせてもらいました。

これまでの協力隊の活動を通して、地域で活動すること、暮らすことについての気づきなどがあればお聞かせください。

西村　当然ですが、当初は朝来市のことも全く知らなくて、地名も分からない。3年間という限られた時間の中で、正直1年目は何から始めれば良いのか、でも早く活動しないといけないって、見えないものに焦ってたんです。なので、1年目は協力隊としての活動をする以前にまず朝来市のことをまず知ることに力を入れました。まず自分の足で動いて目で見て回り、朝来市の人やその繋がりといった「人」を知るっていうのにすごく時間を使ったことが結果良かったのかな。まずまちのことをゆっくり知ることが必要なのかなっていうのは思います。

篠原　僕も西村さんと同じで動き方が分からない時がありました。デザインっていうスキルを持つ者として移住してきたけれど、立場的な部分で当初、生業に繋げるための一歩となる副業としては制約がかかった。じゃあどうしようかとなり、とりあえず、色々な人から話を聞いてみようと。協力隊の担当の方に「まずは素直に人の話は聞いた方がええよ」って諭されたことがあって、それがあったかもしれません。地域の方と話をするなかにヒントも転がっていて、繋がりが増えると色んなところから呼んでもらえるようになりました。

今後、機構の活動を中心に、プラン等の展望があれば。

佐竹　基本的には今の延長だと思います。実績を出していけば、また変わってくる可能性だってある。「移住」と「空き家」の二本柱、それがきっちり形にして、良い流れができてくると、他の朝来市の企業から「うちの企業にも1人2人インターン入れてくれないか」っていうような声が出てくる可能性がある。そうすればしっかりと次の展開へと繋がると思っています。

中島　市役所の移住窓口ではどんな方に対しても平等に対応しないといけないけれど、機構のような中間支援組織に委託をすることでターゲットや職種をフィルタリングできる。そこに僕たちの存在価値や意義があると思ってて。行政じゃないとできない事って当然あるし、一般企業じゃないと出来ない事もある。特にこれだけ価値観が広がった世の中では特に。その間を繋ぐような役割として、機構が存在していければと常に思っています。

佐竹　鑑

愛知県名古屋市出身。兵庫県神戸市で有機野菜を取り揃えるショップを経営。またボランティアコーディネート業、NPO活動などの活動も展開。朝来市山東町の与布土地域自治協議会に勤務。

中島 英樹

千葉県松戸市出身。エンジニア、営業職という職務経歴をもち、兵庫県で勤務した経験も。現在は妻とともに朝来市で暮らす。朝来市山東町の梁瀬地域自治協議会に勤務。

篠原 諒太

兵庫県神戸市出身。デザイン事務所にてデザイナーとして勤務後、フリーランスに。"デザインの知識を使ったまちづくり"のイベントに多数参加。2014年度より朝来市産業振興部観光交流課で勤務。2017年3月、退任。

西村 大輔

兵庫県高砂市出身。スポーツジムでのインストラクターを経て、兵庫県加古川市の大手鉄鋼メーカーでオペレーターとして勤務。現在は地域おこし協力隊として朝来市役所あさご暮らし応援課に所属。

SESSION 2

鹿工房ロス・カサドーレス

Los Cazadores。スペイン語で「猟師たち」。
新たに鹿肉加工施設を立ち上げた
吉原隊員と髙田隊員が語るこれまでのこと、
そして未来の話。

鹿肉加工施設「鹿工房ロス・カサドーレス」が始動したのは何年くらいからですか？

吉原　動き始めたのは2016年1月くらいですね。地元区長さんを通じて加工処理施設となる建物を借りる話がまとまったんです。そして地元の建設会社さんとともに、アイデア出し合いながら、僕らが思い描く鹿肉加工施設を創り上げていきました。そして4月に建物が完成、開業できたのは5月でした。

吉原さんは早くに狩猟免許を取得、猟にも出られています。髙田さんは？

髙田　任期1年目の2015年に銃猟免許と罠猟免許を取得しました。ただ、猟銃を所持するには警察の許可が必要で、それが延び、ようやく2016年末に許可が下りたんです。ですので年始から実際に猟銃を持つようになりましたね。

２人で入山されることもあるんですか？

吉原　２人で、というのはないですね。もっと大人数、地元猟友会の方々と一緒に入山します。罠猟は個人でできるので、個人で入山できます。

髙田　僕は警察から猟銃の許可が下りるまで、罠猟をメインにしていました。勉強になりましたね。獣道を見てどの辺りに仕掛けるか、動物との知恵競べでした。

吉原　罠猟は鉄砲よりも奥が深いかもしれません。

髙田　ただ、ロス・カサドーレスが稼働し始めて、猟に出て狩るよりも、他の猟師さんが持ってきてくださる鹿肉をさばくことが優先になりました。それで手いっぱいで。

吉原　猟はグループで行うので、撃った、倒した、じゃあロス・カサドーレスに…という訳にはいかない。１人で勝手に動いてはダメなんですね。当然、撃った鹿もすぐに血抜きできるわけ状況ではないので、食肉としては状態が落ちてしまう。そういった背景もあり、個人でやれる罠猟のほうが良いんです。だから髙田くんは早起きしてでももっと罠猟に行くべき（笑）

解体については、いかがでしょうか？

吉原　最初、猟師の師匠から手ほどき受けていて、そこに髙田君も加わるようになりました。当初は今ほど上手くいかず、自分たちで食べる分や、市内のシェアハウスに提供したり、地域の方々に配ったりしていました。でも鹿肉を食材として流通させることが目標だったので、これではダメだと。技術向上のために兵庫県が開催する講習会や料理人、料理研究家の方々に教えていただきました。猟師の師匠から教わったことも含めて、自分たちのスタイルができつつある感じです。（精肉は）だいぶ早く、綺麗になりましたね。プロの料理人の方から「良い」と言っていただけたので、他の加工所よりも良いものを提供できていると思っています。さらにこれから技術を磨いていきたいと思っています。

鹿肉の客層は？

吉原　当初は阪神地区のレストランなどを想定していたんですが、現在は地元の方のほうが積極的に使ってくださいますね。これからもっと顧客を開拓していかなければなりません。最近はジビエ料理も認知されてきていますが、やはり鹿肉というマーケット自体がまだ新しいので、それをどう根付かせていくかですね。あと、鹿肉にも牛肉と同じく部位ごとにランクがあるんです。「松竹梅」で言う「松」のランクは利益になる。それ以外の「竹」「梅」を開拓するために、1つとしてドッグフードへの加工を検討しているんです。

ドッグフードですか？

髙田　当初、ソーセージやハムといった、食肉加工業もやるつもりだったんです。ただ設備費用がかかり敷居が高いんです。色々と調べるうちに、肋骨をそのままジャーキーにしているペットフードがあることに気づいた。現在捨てている部位でもあるんです。もともとロス・カサドーレスは捨てられている鹿をおいしく循環させたいというのが理念なんですよ。だからこのペットフードもその理念にのっとっているし、すごく良いなと思って。裾野も広いですし。

吉原　ペットフードはマーケット、設備費用など、様々な面でリスクが低く、いけると思っています。手間もそこまでかからないから、今の2人体制でも商品としての立ち上げが可能なんです。設備投資の返済のために働かなきゃなんないって楽しくないじゃないですか。また、他にも鹿肉を提供するために、竹田地域のどこかにハンバーガーショップか焼き肉屋を開業すれば良い線を狙えるんじゃないかと思っています。僕は実現したいなぁ。

１次隊員である吉原さんは３年の任期中に起業され、髙田さんは１年目からスタートを切られました。展開にスピード感があります。

吉原　僕の中でそれは当たり前だと思うんです。任期中に築きあげないと。短距離走で準備もなしにスタートは切れない。スタートライン立って、スパイク履いてませんじゃ走れないじゃないですか。僕らはフライングしてますからね。そのぐらいじゃなきゃいけない。トライ&エラーもできる。協力隊としてのお給料があるので冒険もできる。

髙田　僕は幸運なことに、すでに吉原さんという存在がいて、起業への具体的なプランがあったんで、それに取り組むことで今に繋がっています。ただ協力隊としては、地域でのミッションがおざなりになってる部分も感じます。それぞれ、３年後に自分のことをやるっていうのでもいいのかなと思いますね。ただ、協力隊の３年間の任期はすごく動きやすいので、この間に色んなことが取り組めるのが魅力です。「切羽詰まった感」を持ちつつ、やっていかないとと思っています。

吉原　協力隊になったほとんどの人が志を持って地域に入って来ていると思うんです。その取り組みに正解不正解はない。髙田君が言ったように、地域のことに注力して３年間やりきって、４年目からはじめて自分のことを考える。多分そういう隊員は周囲が何とかしてくれるんですよ。「こいつを助けてやろうか」って。それもありだと思うんですね。僕は協力隊として何を成し遂げたのかと言われると何もやってない。でもそれはそれでいいのかなって。要は朝来市にちゃんと根付くことができれば、恩返しはこの先できるでしょうし、するつもりです。様々なスタイルがあっていいのかなと。とりあえず真剣になるしかない。何をするにしてもね。

吉原 剛史

東京都足立区出身。オーストラリアの大学を卒業後、大手金融企業に勤務。オーストラリアに16年間在住する。その後、３年半かけて世界一周の旅に。2014年度より竹田地域自治協議会で勤務。2017年３月、退任。

髙田 尚希

兵庫県宝塚市出身。以前は営業職として東京と大阪で勤務。またLLP制度を利用し仲間と会社を立ち上げた経験もある。現在は朝来市和田山町の大蔵地域自治協議会に勤務。

加藤 菜穂子 × 加藤 貴之

NAOKO KATO × TAKAYUKI KATO

SESSION 3
トリノスバコ

生野町の奥銀谷地域と生野地域。
かつての鉱山町で活動していた２人の隊員は夫婦となった。
家族の会話から見えて来る生野町のこれから。

加藤貴之隊員（以下、貴之）は現在はどういった活動をされていますか？

貴之　現在は「ふれあい屋台」を毎週火曜日に朝来市生野町内の２カ所で開店しています。１カ所は自宅ガレージ。生野町の旬の野菜・食材を使った揚げ物や天ぷらを販売しています。所属する奥銀谷地域自治協議会のミッションが「お店づくり」。奥銀谷には生鮮食品を購入できる場所がないし、不便な状況が続いています。なにより買物は女性にとっての楽しみでもある。実際に商品を見て買えるような場所がない。あとお店は井戸端会議の場所にもなるので、そういった場づくりをしていきたいというのが地域の希望としてありました。僕自身もお店作りをしたいと思って来た。コミュニケーションがある場が好きなので。そのためにも最初の１年間はどういったお店がいいのか地域の人にヒアリングをしました。１人暮らしのお年寄りの家に伺うと、出来合いのものとお味噌汁しかないので料理も大変だと。そういった方々の買物が必要だと思ったんです。

こういったお店の経験はあったんですか？

貴之　実は飲食の提供は初めてのことなんです。なので最初は簡単なものから始めようと、焼きそばやスパゲッティといった鉄板で作れるものから始めました。ですがお年寄りの声を聴くと、「週に１度は天ぷらやコロッケを食べたい」という声があった。そこで揚げ物中心に変更しました。ヘルシーなものや体に良いものを提供したかったので地元農家と提携して。生野マインホールで行われている朝市を手伝う中で地元農家の方と繋がり、旬の野菜の情報も教えてもらえるようになりました。常連さんもできて、楽しみにしてくださっています。

今後の展開については？

貴之　もちろん４年目以降も続けていきます。今は１回１回、自家用車にコンロや機材を積んだり下ろしたりしているんですが、それだと１日1カ所が限界で。そこで軽トラを改装しキッチンカーを作り効率化を図る予定です。そして商用ベースに乗れるように頑張っていきたい。ただ、それだけだと食べていくのは難しい部分もある。そこでもう1つの生業として介護施設で働くことにしました。屋台作りの根底にあったのは地域の高齢者福祉に役立ちたいという思いでした。おじいちゃんおばあちゃんの役に立ちたい。秋に資格も取得し介護職員として生野町内の施設で非常勤で勤務します。

加藤菜穂子さん（以下、菜穂子）は隊員として生野町に来られ、そして貴之さんとご結婚されました。今は妻として一児の母として、いかがでしょうか？

菜穂子　結婚が2015年の４月、そして妊娠を機に2016年３月、協力隊を退任しました。約１年になりますね。現在は協力隊ではなくなったけれど、主人の屋台を手伝いながら、実はカフェを作っている最中なんです。自宅のガレージをDIYで改装して、地域のお年寄りの方でも気軽に入れるカフェに。この夏のオープンを目指しています。ちょうど娘が座って１人で遊べる頃ですね（笑）。私自身、店頭に立って接客できたらと思っています。そしてもう1つ、屋台やカフェ全体を取りまとめる「トリノスバコ」という法人を立ち上げました。皆が集って帰れる場所という意味です。その場所の中には「ふれあい屋台」があり、カフェがあり、「ふるさとウェディング」の推進があります。

「ふるさとウェディング」？

菜穂子　私たちは史跡生野銀山で結婚式を行い、生野町内の施設で市域の方をお招きし披露宴をしました。それが「ふるさとウェディングコンクール」で観光庁長官賞をいただいたんです。朝来市では結婚式を挙げられる人も場所も少ない。でも市内には素敵な施設がある。「ふるさとウェディング」でまちの魅力を活かした結婚式を広げていければと思っています。私自身、一主婦、一住民となったことで協力隊の頃よりも深く地域に溶け込むことができていると感じています。地域の方に子育ての知識を教わることも多いですし。今作ってるカフェでも多世代の交流も考えています。キッズスペースを設けてお子さんが遊べる場となれば、お母さん方にも来ていただきやすくなる。そこでおばあちゃんやお母さん、子どもたちの多世代交流が生まれる。おばあちゃんの知恵やお料理を教えてもらったりと、発展していく場になればいいなと思っています。

生野に来て良かったと感じることはどんなことでしょうか？

貴之　人が優しいことでしょうか。皆さん、コミュニケーションをとるのが得意で、日本中を旅してきましたがこんなフレンドリーな場所はない。そこで出会った妻とも、生野でお互いに形にしたいことが似ていました。性格は正反対ですが（笑）。自宅でも生野町の将来について語り合うことも多いですね。当たり前ですが１人ではできないことができる。これからは娘のためにも頑張らないと思っています。

この３年間を振り返っていかがでしたか？

貴之　１年目はじっくりと地域の人の声を聞いてまわり、そして２年目の初めには事業を興しました。３年目から始めたら遅い。振り返ってみて、試行錯誤に１年はかかりますから。任期最終年度の３年目にはそれを軌道に乗せ、安定させることが大事ですね。実はふれあい屋台の仕組みの全国展開を考えています。起業にはお金がかかるけど、お店作りのとっかかりとして屋台はすごく良いと、３年やってみて感じます。５万円あれば始められますから。商品についても土地に応じて変えていける。地域おこし協力隊になった方や地域で起業を目指している方にアドバイスできることはあると思っています。

ご自身と、奥銀谷地域、今後の展望があればお聞かせください。

貴之　「福祉」を守りではなく攻めの手段として活かした「攻めのまちづくり」の事例としていきたいですね。「ここにくれば一生安心して暮らせる」とアピールできれば、移住の促進にも観光の手段にもなります。まち全体として、高齢者が暮らしやすい、お年寄りに優しいまちとして元気になっていってほしいと思います。着任当初はこれまでの肩書き「飛脚」を名乗ることが多かったけれど、結婚してからは歩く機会も減ってしまって（苦笑）。夢としては持ち続けていて、一家で歩いて旅したいですね。もちろん娘も一緒に。

加藤 貴之

東京都板橋区出身。大学卒業後、IT企業に就職、その後アイドルのマネージャーを経て、2013年、「現代の飛脚」として活動をスタート。2014年度より奥銀谷地域自治協議会で勤務。2017年３月、退任。

加藤 菜穂子

兵庫県姫路市出身。大学卒業後、神戸市のアパレルメーカーに就職。一人旅で生野町に下り立ち、以後も訪れるように。2014年度よりいくの地域自治協議会で勤務。2016年３月、加藤貴之隊員との結婚、妊娠を経て退任。

INTERVIEW 1

松木 祥平

SHOHEI MATSUKI

協力隊となって３年、長かったですね。２年目から朝来市和田山町竹田地域で「辻処ぽん」というアンテナショップをオープンさせましたが、実はこれが想像以上に大変で…。週６日間、１人で営業しなければならなかったため、外に出て地域で動くことができず、当初思い描いてたプランがなかなか実行に移せませんでした。協力隊として任期を終えますが、ここで一度新しい取り組みにチャレンジします。昨年秋、民間の移住定住相談員の方と知り合い、お話させていただく機会がありました。その中で、朝来市多々良木にある「田舎暮らし塾」という施設を活用した宿泊・ワーキングスペースを活用できないかとお話をいただいたんです。ここで好きなことを仕事にしてみたらどうか？と。部屋数も多く、素泊まりの民宿として活用もできますし、中庭には石釜があるので、なんならピザなども調理できる。ここで自分のプランを実現することにしました。

ただ朝来市では観光の宿泊客は週末がメインとなってきます。一週間のうち人が泊まることのほうが珍しいんです。市内には大学の調査チームがたびたび訪れるということもあり、大学のゼミ合宿といった用途を開拓していきたい。僕自身、研究家肌なところがあり、学術機関など方面が似たような人へセールスをしていく予定です。また宿泊のほか、庭にウッドデッキを設えて、ペット可のカフェとしての展開も考えています。吉原隊員と高田隊員とも連携し、彼らが経営している鹿肉加工処理施設「ロス・カサドーレス」で製造予定のペットフードをここで提供していきたい。また多々良木の山に上がることもでき、そこからは市内を見渡せる綺麗な風景もある。料理の食材には地元の野菜を使った料理を出したりと、朝来市ならではの体験を提供できると思っています。

人は好きじゃないことをやろうとしても頑張れません。特に地域おこし協力隊は望んでいないことを頑張ったからといって見返りがあるわけではいし、やって当たり前。自身のやりたいことを仕事としていくことが良いと、これまでの反省として思いました。地域での活動で重要なことは「分かりやすさ」だと感じます。まちの人と話す際にも分かりやすい切り口で接しないと伝わらないことがあります。それを踏まえ、良い人に巡り会うことができれば、トントン拍子で物事が進みます。そして失敗をしても挽回が効く。地域おこし協力隊として学んだことを、今度はこの場所で形にしていきたいと思います。

松木隊員の新たな拠点となる「いなか暮らし塾」。趣ある民家を宿・カフェなど複合施設として運用し、地域拠点としてのり活用を行う。

Profile

兵庫県神戸市出身。大学院修士まで文化人類学・民俗学を学ぶ。フリーペーパーの広告営業・取材、IT技術者等の経験がある。2014年度より朝来市商工会に所属。2017年３月、退任。

INTERVIEW 2

今村 未希

MIKI IMAMURA

朝来市生野町での活動では泣いたし笑ったし怒ったし悔しかった悲しかった、でもそれ以上にとても楽しかったですね。全て過去形なのが切ないですが（笑）。この３年間でコミュニティで生きるということはどういうことかを実感しました。都市部で暮らしていると隣の住人のことも知らない。でも生野町には隣保や区で連携、協力しながらまちの生活を楽しくしていくというコミュニティがありました。人口は少ないですが、逆に言えば１人ができることが多いということ。コミュニティについてどういうことか大学で学んだけど分からなくて、実際にこのまちに入ってみて、まちで活動していく中で心身を通して分かったんですね。

そこでは「余所者（よそもの）」なりの役割があると実感しました。何も知らないから図々しくも大胆に核心を聞いたり触れたりできるんです。まちの皆さんがやりたいことは共通していることもありました。それをまとめ、実行していくための方法論が「余所者」だからこそ客観的に見えてくるんです。「余所者」ということで許してもらえる部分もあったりと、その地域が求めて来ることを円滑に効率よく実行する上でのメリットではないかなと思います。まちの皆さんはそれぞれの生活があり、まちづくりに携わっておられるので、私は皆さんが動けないときに動くことができる。国内外の事例を調べたり、新しい情報を求めている人に提案したり、あるいはキーパーソン同士を引き合わせ、繋いだり。そうしてまちの人々が本当にやりたいことをサポートしてコネクトしてきたつもりです。

今後は生野町での経験を活かし、今後は様々な立場におられる人の声も活かした持続可能なコミュニティを作ることをライフワークとしていきたいんです。持続可能に発展するためには中心人物が変わっても持続するプロジェクトでないといけない。想いを共有して柔軟に対応できる、誰が入っても基本的なことが廻る組織じゃないといくら良い活動をしていてもいずれ破綻します。それは生野町でも同じことです。私がいてもいなくても変わらずに廻らないといけない。その根幹にあるのは地域の人の想いだし、それを実現することがミッションだったので。誰のためにやってるかというとそこなので、もう何を言われても気になりません、特に２年目から図太くなったと思います（笑）。これからも生野の町に関わっていきます。秋祭りはもちろん、高校教育、芸術祭など様々な場面に顔を出していきます！

（上）県立生野高等学校の「グローバル教育コーディネーター」に着任。高校生と企業・大学・行政との活動を推進している。校長先生からの信頼も厚い。
（下）市役所生野支所の一員として３年間、生野地域とのコーディネーターを担った。

Profile

滋賀県大津市出身。高校卒業後、カナダへ渡りインテリアデザインを学ぶ。帰国後、社会に関わる仕事に就くため大学へ入り、卒業。インターンとして国連での活動に参加した経歴を持つ。2014年度より朝来市生野支所地域振興課で勤務。2017年３月、退任。

あなたはまちの未来
ASAGOiNG

朝来市

朝来市市長公室総合政策課
〒669-5292 兵庫県朝来市和田山町東谷213-1
TEL. 079-672-6110
www.city.asago.hyogo.jp